

第27回 シンポジウム ル ポ

東京大学 松井 知己

青葉がまだ目にあざやかな5月12日、第27回シンポジウムが仙台市民会館において開かれた。今回のテーマは「ビジネスロジスティクスシステムの構築に向けて」となっており、プログラムは製造業、流通業の基本的な問題であるロジスティクスの諸問題を理論、実際、企業内、企業間等さまざまな角度から照らし出す形で構成されていた。近年“物流”という言葉によって変わりつつある“ロジスティクス”であるが、単語のみが先行し、あらゆる場面に氾濫してしまっている感がある。これを整理し、その本来の意味を見つめ直す意味でも、今回のシンポジウムのテーマは非常に意義深いものであったと思われる。当日の参加者は、正会員、賛助会員61名、非会員21名の総計82名であった。以下、個々の発表について報告をしていきたい。

午前10時より始まった第1番目の講演は、東京工業大学の圓川隆夫氏による「多段階ロジスティクスシステムの設計」についてであった。近年、製品のライフサイクルが短くなり、激しい時間競争の時代となったことから、効率的なロジスティクスシステムのより速やかな構築が必要不可欠となりつつある。氏の発表は、メーカーから小売り店までの物流全体を見渡した際の効率的なロジスティクスシステムの構築に重点をおいたものであった。氏の講演では、これを達成する際の重点として“生販全体のリズムを決定しているボトルネックの打破”と“情報の共有化による多段階の活動の統合”の2点があげられた。またこれらの実現には情報武装と標準化が必要不可欠であることが指摘された。発表は豊富な資料にもとづく具体的なものから、高度に抽象化された議論までが幅広くなされたため、時間がもう少しあったらとの印象を受けた。また、第2番目以降の講演における具体例に呼応できるようなプログラム構成になっていれば、シンポジウム全体としてさらに面白くなったのではないかと感じられた。

第2番目の講演は、住友金属工業㈱の上野信行氏によるもので、題目は「生産・物流システムの統合化」であった。この講演では、住友金属で開発され、現在鉄鋼業の場での生産・物流統合管理に用いられているシステム

をもとに話がされた。発表の内容は、このシステムの具体的な構成ではなく、このシステムをつくるにあたってめざしたコンセプトについての話題が中心となっていた。この意味で、圓川氏の発表がメーカーから小売り店までのグローバルな視点での議論であったのに対し、上野氏の講演は、企業内での物流に視点をおいたものであった。このシステムの設計コンセプトにおける特徴的な点は物流を生産から切り離して論ずるのではなく、生産から出荷までの一貫した生産・物流システムに対する操業計画の立案をめざしているところであり、「物流も製造の一部、製造も物流の一部」という生産と物流の統合化の考えにもとづいたものとなっている。住友金属工業では特に多品種少量の注文生産を行なっているため、一貫した操業計画を立案することが非常に大きな効果を生み出しているように思われる。一般に、どのような状況においてこのようなアプローチが有効であるのか、非常に興味もたれる。発表は多数のカラー写真をまじえたたいへん楽しいものであったことを付け加えておく。

以上で午前中のプログラムは終わり、以下13:20よりの午後の発表に移る。第3番目の発表は、㈱日通総合研究所の亀田勝好氏によるもので、テーマは「企業間物流統合の現状と課題」であった。午前中の上野氏の講演が企業内の生産・物流システムの統合、すなわち物流の垂直統合に対するものであったのに対し、亀田氏の講演は企業間の水平統合に対するものであった。基本的には車両による配送について、さまざまな共同輸送の形態の可能性についての議論が平易な言葉でわかりやすくなされた。一般に、多岐にわたる流通経路の統合化によって、物流の効率化のみならず運転手等の人手不足や交通混雑、排気ガス等の多く問題が緩和されることが期待される。しかし統合化に際しては、その阻害要因として緊急配達、時間指定配送、荷の積み下ろし等の付帯義務など依然として多くの問題が残されていることが指摘された。また配送経路の統合化だけでなく、それに伴う物資の共同所有の可能性についても論じられたが、現実にはまだ多くの困難が伴うことが予想される。

第4番目の講演は、プラネット物流の津久井英喜氏に

よる、「流通VANを基礎とした物流共同化の実際」についてであった。発表では、前の亀田氏による物流統合の一般的な議論に対して、日用品雑貨業界において現在実際に行なわれている共同輸送の事例をもとに、物流共同化についての具体的な議論がなされた。特に亀田氏の講演において示唆された可能性のいくつかを実現する方策とそれに付随してさらに起こる具体的な問題点等の報告が非常に興味深かった。また共同輸送の実現における本質的な阻害要因として、発荷主、輸送業者、着荷主の間の力の決着構造があることが指摘された。この問題に対し、

価格体系の見直し、すなわち「合理化を誘導する料金体系」の導入を始めているとの報告であったが、時間のためその具体的な方策について知ることができなかったのが非常に残念であった。また日用品雑貨業界は衛生・健康と深くかかわる商品を扱っていることから、環境保全を考慮しなければならないとの指摘がされたが、これについての具体的な報告も時間のため省略されたことが非常に残念であった。

最後の発表は、構造計画研究所の中野一夫氏によるもので、「ロジスティクス・ソフトウェア—今後の動向—」と題するものであった。氏の発表では、初めに、物流最適化のための意思決定支援ソフトウェアの紹介と、さまざまな企業におけるその活用状況についての報告がされた。特に、ソフトウェアの中でもここ数年急速に普及しつつあるシミュレーションソフトウェアと、それをロジスティクスシステムに組み込む際にそれぞれの企業においてカスタマイズされた具体例について、実際のコンビ



ュータ画面のスライドを用いた解説がされた。次に、シミュレーションをベースとした意思決定支援システムの構築において、分散シミュレーション環境が重要となることが指摘された。これにより、OR技術者とシミュレーション技術者のみがシミュレーションソフトウェアを使っているという現在の状況に対し、生産現場での容易な適用が可能となる。しかしこれを実現するためには、容易に使用できる専門シミュレータの開発とともに、生産現場における分析者の養成という課題が残されていると思われる。

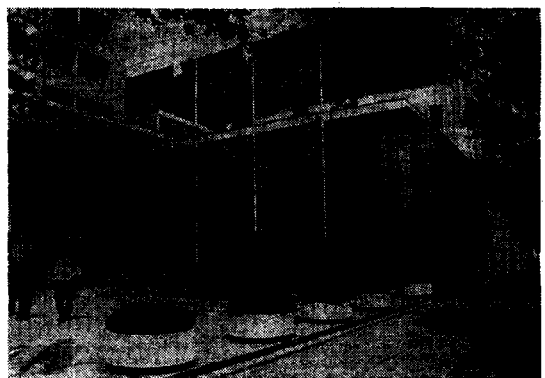
今日においては、ロジスティクスのもつ問題点が多岐多様にわたり、全体を見通すこと自体が非常に困難な状況となりつつある。このような状況を打開するためには、ロジスティクスのもつ意味を整理し、正しく把握する必要がある。このためにも今回のシンポジウムのような、理論や事例を含めたグローバルな視点での議論の場を設けることがますます必要となるであろう。

平成4年度春季研究発表会 ルポ

平成4年度春季研究発表会が、5月13日(水)、14日(木)の両日に仙台市民会館で開催された。

今回の特別テーマは「来たるべき高度技術社会の展望」で、このテーマの特別講演および特別セッションがOR学会のPRも兼ね、会員以外の一般市民にも公開された。

発表件数は、特別講演3件、特別セッションの招待発表8件、一般発表112件(内、ペーパーフェア7件)であり、参加者は、314名(内訳、正会員229名、学生会員38名、賛助会員33名、非会員14名)であった。



会場入口